

## 2. ポスト＝ローマ期から中世初期イタリアにおける 文書主義とリテラシー能力

城戸 照子

### はじめに

イタリアにおける近年の中世史研究動向を、史料論研究にテーマを絞って検討する際、ここでは筆者が関心を持つ中世初期研究にとりわけ注目することをお許し頂きたい。ところで、地中海世界の一部としてイタリア半島を研究対象とするのは、もちろんイタリア人だけではなく、ヨーロッパ各国出身の多様な研究者たちである。その意味では、イタリア学界での研究傾向はイタリア的と呼べる特徴も持ちながら、一方でイギリスやフランス、ドイツ、スペインといったヨーロッパ各国での研究動向と通底している。本稿での史料論研究動向素描は、従って、年代的には5、6世紀から紀元1000年までを主たる対象とするが、地域的にはヨーロッパ学界全体の研究動向を視野に入れておきたいと考える。

### 1. 文書史料とリテラシー能力

イタリアの史料伝来状況は、とりわけ紀元1000年以前には、同時期の他地域と比較すると数が多く、また王や皇帝が発給した文書以外に、私文書類が多数伝来しているのが特徴とされる。相対的に恵まれた伝来状況であるといえよう。そこから研究視角も、限られた史料を深く分析することによって史料論自体を精緻化するよりも、史料類型に留意して、多様な史料を補完的に組み合わせて読み込む手法が、なお多いように思われる。

近年の研究により、土地や家屋などの不動産に関する取引や農地の耕作と地代支払いの農地契約など、様々な契約文書の伝来や作成状況から、イタリア北部について言えば、自由身分を持つ契約当事者たちの読み書き能力は中世初期にも決して低くなかったとの評価が、一層強調されるのにまず注目しておこう。ケンブリッジ大学のマッキテリックを中心とする研究者たちは、いわゆるポスト＝ローマ期のオストラゴート族の支配期、ランゴバルド王国期、続いてカロリング王朝期の、教会人のみならず自由身分を持つ俗人のリテラシー能力、つまり読み書き能力の連続性と高さを印象的に叙述している〔参考文献番号(5), (7), (10), (11), (12)。以下同様〕。ただし研究手法は、旧来の史料を丹念に分析し研究動向に位置づけるものの、著しい新機軸を打ち出すようなものではないように思われる。

文書史料の伝来数の多さと内容がリテラシー能力の高さをうかがわせ、リテラシー能力の高さが文書主義の伝統が維持されていることを示唆し、その伝統が文書作成技術や文書作成職 *notarius* の連続性と文書保存の意欲を支えていることを想定させ、そのために文書史料の伝来が相対的に多いことになる。どこか循環論法に陥りかねない危険があるが、西ローマ帝国の崩壊とゴート戦役の荒廃による停滞の後、従来以上にカロリング朝以前のイタリア社会の活力を高く評価する研究動向に適合的な、基本的イメージとなりうる。

そうしたイタリア社会を印象的に描いたものとして、2003年に刊行されたエヴァレットの『ランゴバルド期イタリアのリテラシー。568年頃-774年』が挙げられよう〔(7)〕。イタリア北部に進出したランゴバルド族は、支配層とはいえ少数者として、イタリア定住直後から話し言葉としてのもとのゲルマン系言語を捨てたという。確かにラテン語で書かれた『ランゴバルド法典』の中にゲルマン系の書き言葉が残っているものの、その用語自体も多くない。在地の裁判慣行を尊重し教会との良好な関係を維持してポスト=ローマ期のイタリア社会に融け込む形で安定したランゴバルド社会は、自分たち蛮族の侵攻でローマ期の高いリテラシー能力を低迷させたどころか、それを維持し、いわゆる「カロリング・ルネサンス」の先駆けですらあったという。

伝来した370通にのぼる私文書の証書を分析してエヴァレットは、取引の文書作成の現場を以下のように想定している。文書作成希望者と証人が出席する中、前もって知らされた個別内容（蠟板や羊皮紙の切れ端に書きとめられている）が確認された後、文書作成者が文書を一度で書き上げ、証人が署名し、引き渡しの儀式が行われる。一連の作業は、考えられてきた以上に、実務的で時間もかからないと思われる。それを可能にする要素として、書き言葉と話し言葉の差が小さいラテン語（話されたままを書いて理解されうる）、早書きが可能な筆記体（*cursive*）、小文字・合字・縮約形・省略などの使用による多様な書体といった文書作成技術があげられている。作成から引き渡しまでに2～3時間と想定すれば本文を書くのに15分程度しか時間がなく、そのためには文書の標準サイズ（42センチ×25センチ、33行）で1行25秒程度かけられるという試算までされている。

読みやすいカロリング小文字によって書かれた端正なカロリング期の史料群と比較されて、ランゴバルド期の証書は、その読みにくさと多様性から、リテラシー能力の低下の証拠とされてきた。それを、文書作成の手早さと手軽さは、文書が社会生活に不可欠なものである証拠であり、筆跡は美しくなくとも証人としてとにかく自分の名前を記入することができる俗人が一般にいて、逆に社会の文書主義の伝統の連続とリテラシー能力の高さを強調したのである。同じ史料を取り上げて肯定的に分析し、全く逆の評価をして社会の活動的な面を強調して見せたエヴァレットの主張は、単なるレトリックではない。考古学研究などの進展とも相まって、西ローマ帝国の政治的崩壊の後も、ポスト=ローマ期として8世紀カロリング朝到来以前の社会の活力を従来より高く評価するその研究動向に、史料分析とリテラシー能力の研究結果から寄与しているのである。

## 2. 史料刊行と史料批判

こうした研究動向は、どのような史料刊行や史料分析によって支えられているのだろうか。重要な各地の地方古文書館や大学・大学院などの研究教育機関以外で、イタリアで中世史に関わる最も重要な研究機関である、イタリア中世史研究所 *Istituto Storico Italiano per il Medio Evo* の史料刊行事業について確認してみよう。中世初期の最も重要な史料刊行を多く含む *Fonti per la storia d'Italia*（「イタリア史史料集成」）のシリーズでは、1990年から1993

年にシリーズ no.112 から no.118 まで刊行された後は、2007 年まで途絶している。出版のペースとしては、残念ながら決して活発とは言えない上に、対象年代も 14 世紀から 18 世紀までのものが主流となっている。中世初期に関しては、2003 年に例外的に no.65bis として、*Codice diplomatico Longobardo (sec.VIII)*、vol.IV、parte II が出版されているのみである。

むしろ、イタリア中世史研究所では、*Fonti per la storia d'Italia* 以外の新しいシリーズが増え、異なる枠組で史料刊行が進んでいる点に注目される。1994 年からは *Antiquitates* という新しいシリーズで中世盛期を対象とする史料刊行が開始された。マキャベリの *De principatibus* を皮切りにフィレンツェ共和国やトスカーナ地方の 14~15 世紀の史料刊行を多く含み、2006 年までに 27 冊を数えている。

同様に、年代記や教皇の事績録を含む *Rerum Italicarum Scriptores (terza serie)* のシリーズで 2000 年から 2005 年の間に巻数 1 から 6 まで、*Regesta chartarum* のシリーズで 1993 年から 2002 年に 43 巻から 52 巻まで (中にボローニャについて、11 世紀文書群及び 4 世紀から 12 世紀のボローニャ教会の文書集を含む)、*Subsidia* のシリーズで 1995 年から 2007 年までに巻数 1 から 9 まで、500 年から 1500 年までのイタリア史史料集成と銘打たれた *Storici italiani dal Cinquecento al Millecinquecento ad uso delle scuole* で 1990 年と 91 年に 1-2 巻分、中世フリウリ地方の教会史料シリーズ *Fonti per la storia della Chiesa in Friuli. Serie medievale* で 2006 年と 2007 年に 14 世紀史料が 4 巻分 (no.3 は 16 世紀までの史料を含む) と、合計 6 つもの新しいシリーズで、史料刊行がなされている。

こうした刊行状況からは、新しい分析視角から斬新な史料批判を展開し、旧来の既刊史料集の批判的再検討と再刊行を試みるよりも、なお刊行されていない大量の中世盛期史料を営々と刊行し続けようとの努力を感じることができる。同様に、まず標準的で規範的な史料刊行や史料紹介をしようとの方向性は、ヨーロッパ中世史料目録・人名辞典とでも言うべき *Repertorium Fontium Historiae Medii Aevi* (ラテン語版) の継続的刊行にも現れていよう。この *Repertorium* は 1964 年に刊行され始めてから長きにわたり刊行が続けられてきたが、2007 年に第 11 巻第 4 分冊 (通算で 26 巻目) が *Fontes W-X-Y-Z* のタイトルで刊行され、一応の完結を迎えることになった。

確かに、イタリア学界を中心として、ヨーロッパ全体で、中世史料集成に関する検討が、1950 年代と 1970 年代に盛り上がったことはあった。イタリア史研究所創立の記念事業として、70 周年記念 (1953 年) と 90 周年記念 (1973 年) には、それぞれ「ヨーロッパ中世史料国際研究集会」を開催し報告集を残しているのに、それがうかがわれよう。しかし 1953 年の報告集『最近 70 年 (1883-1953) のヨーロッパ中世史料の刊行』では、なお 19 世紀末の集成事業と連続して史料刊行が捉えられているし、1973 年の『中世史料と歴史学の問題』にしる、既に 35 年が過ぎている [(1), (2), (3)]。また、広義の文献学に史料論も含まれると考えれば、*Subsidia* のシリーズ中に『テキスト批判入門』が 2007 年に刊行されているが、それもドイツ法制史家カントロヴィッツ (1895-1963。ドイツからアメリカ合衆国に移住) の再評価に伴い、古典的業績のイタリア語訳が刊行されたに過ぎない。結論として、近年の

研究動向で史料分析とテキスト批判をめぐる大きな問題提起は、イタリア学界からはあまり出ていないように思われる [(9)]。

### 3. 「メッセージ伝達と記号表現」研究集会

では、史料類型論と史料批判、史料の保存・伝来と放棄による欠落、後代の筆写と再集成、偽文書の再評価、口伝と文書の補完関係など、ヨーロッパ歴史学界で、近年繰り返して取り上げられてきた史料解読の精緻化に関わる諸問題について、イタリア学界はどのような反応を見せてきたのだろうか。とりわけ中世初期に関しては、最も重要な国際研究集会であるスポレート学会での研究動向が、その疑問をさぐる1つの手がかりとなろう。

1990年代末から2007年まで、ここ十数年のスポレート学会で史料論とテキスト分析が直接のテーマとなることはなかったが、興味深いのは、2004年のテーマ「中世初期におけるメッセージ伝達と記号表現」(Comunicare e significare nell'Alto Medioevo)である [(4)]。後代に歴史史料として利用されるものを、同時代人にとってのコミュニケーションに必要な手段として、また何かを伝達するために示す手段として、再考する試みである。所収された論文は、30本ののぼり、依拠した史料によって異なるが、対象とする年代は主として5世紀から12世紀まで、対象地域はブリテン島とビザンツ帝国を含むヨーロッパ全域に広がっている。例外として、貨幣に打刻された図像の象徴性と意味を考察する論文で、比較の対象としてローマ帝国期のものに加え、アテネのドラクマ貨の写真資料まで引用されているものがある。地域的にはビザンツ帝国領域の史料に限定した論文も4論文ある。

テーマは様々で、史料論との関係で本来期待されるような、文書史料やリテラシー能力、ラテン語の変化に関わる分析の他に、多岐にわたる。文化史に関わるアプローチでは食物、衣服とその色調、身振りなどで可能になる伝達が考察され、教会史に関わる問題では神学論争や聖者伝の内容の伝播の問題、キリストのイメージや聖書の記述、教会における典礼の象徴性などもテーマに関わる切り口となっている。コミュニケーションの問題に関連しては、書かれたものが移動する(あるいは筆写される)という形での内容の伝播や普及が考察される論文や、いわゆる「ゲルマン民族の大移動」や巡礼による異文化間交流、ラテン語と、ギリシャ語やアラビア語などの他言語との関係の問題、オーラル・コミュニケーションに関わる仕事もある。農村史における領主＝農民関係のコミュニケーションを取り上げる論文もある。

こうした多彩な論文の中から、史料論の動向に留意する本稿にとって特に注目すべきイタリア人研究者の論文に注目しよう。まず関心を持つのが、1モンタナーリ「言語としての食物」と2アンドレオッリ「土地の言語」である [(13), (6)]。

1の著者モンタナーリと2の著者アンドレオッリは、いずれもボローニャ大学の中世史研究所の教授で、農村史及び食物史の専門家として高名である。1と2の論文はいずれも従来の研究成果をまとめあげた論文ではあるが、研究手法としては多様な種類の史料を組み合わせて引用するシンプルな方法が取られている。モンタナーリは食物の持つ意義と象

徴性、食材としての具体性、食生活の社会的構造について総合的に描いているが、史料についての言及や分析に特に新味はない。2のアンドレオッリの論文でも、自然観、耕地の種類毎のヒエラルキー、実態、裁判文書に依拠した実際の土地利用の検討といった項目が並ぶが、史料に対する分析視角が特に再検討されているわけではない。本稿の目的である史料論的議論を深める材料としては、幾分物足りないといえる。

上記2編に加え、以下の3編があることを簡単に紹介したい。まず、3 モスタート「コミュニケーション、読み書き能力と、中世初期社会の発展」、次いで4 フィッソーレ「中世初期のノタリウス文書における署名と認証。役割の解釈と史料の機能の表象の間で」、最後に5 マッキテリック「カロリング期の過去と歴史・法・コミュニケーション」である〔(14), (8), (12)〕。

この3の著者マルコ・モスタートは現在ユトレヒト大学歴史部門の中世史教授で、中世のコミュニケーションや心性史、また図書館を研究テーマにしている。図書館というテーマは、昨今注目されている広義のアーカイヴス研究の隆盛に接合できるものと考えられる。また同時代の「伝達」という視点から史料を再評価しようと試みる点で、新しい研究動向に関心が高いといえるのではないか。この論文には、「社会的現実 social reality・実在 realia・理念 ideas／言葉 words」を3つの頂点とする三角形から発されたメッセージが、「絵に描く」、「話す」、「書く」という行為を通じて伝達され、特に「書く」行為から作成されたものが「文書庫」「行政組織」、「図書館」、「学校」で保存され、それらがまたメッセージを発する主体の三角形に戻っていくというフィードバックの図が付されている。著者は書くという行為から生み出されたもの、すなわち現代の我々にとっての史料を、社会全体の多様な「伝達」のシステムの中に正しく位置づけようと注意を払い、文書史料の相対化に説得力のあるモデルを構築しようと試みている。こうした思索は、中世の口誦伝承といった文字化されない伝達手法への注目とともに、確かに近年の史料批判の一部をなしているといえるだろう。

4の著者ジャン・ジャコモ・フィッソーレはトリノ大学文学部教授として長年中世史と古文書学・古書体学を教授してきた、いわば伝統的な古文書学者といえる。2の論文も、中世初期の文書作成者ノタリウスの文書作成における重要性を強調し、その役割としての署名について、ファクシミリ版史料の書体を詳細に検討しているが、その関心は従来の古文書学と古書体学の枠組を超えるものではないように思われる。

5の著者マッキテリックは既に紹介したが、ケンブリッジ大学教授として、シドニー・サセックス・コレッジでフランク期の古文書学の泰斗として活躍し、中世初期の政治史・文化史・社会史・思想史など広汎な分野での研究と著作が知られている。その研究手法は正統的で緻密ではあるが、通説を覆すような斬新な視角を持ち込むことにはむしろ禁欲的であるように見える。

ここで、同じくイギリス人のイタリア史研究者で、ポスト＝ローマ期から中世初期にかけての地中海地域研究の第一人者であるオックスフォード大学のクリス・ウィカムの、問

題提起は刺激的ながら研究手法は慎重な姿勢を想起することは、そう不自然でもないと思う。ウィカムがその記念碑的な著作『中世初期の枠組形成。ヨーロッパと地中海、400-800年』において、北アフリカや中東の農村史の史料までも縦横無尽に利用しつつ、キリスト教ヨーロッパ世界だけではない地中海世界を描き出そうとする際の研究手法にも、共通するように思われる〔(15)〕。引用される史料の多様性と博覧強記ぶりに圧倒されるものの、その分析と引用のしかたはあくまで正統的で、むしろ時には描写によって語らせる羅列的なものともうつる。

### おわりに

以上のように、中世初期史における史料論について、イタリア学界においては、あまり斬新で明解な問題提言の姿は見られない。確かに、伝統的な古文書学や古書体学の第一人者である各国研究者は（むろんイタリア人研究者を含め）、イタリア中世初期の多様な史料利用に長けている。しかし、認識論や記号論、「記憶」や「伝達」をキーワードとするような新しい史料批判を共通の問題意識として研究者が史料論としての議論を深めていくには、なお今後の研究進展を待つ必要があるように思われる。

### 参考文献

- (1) AA.VV.: *La pubblicazione delle fonti del medioevo europeo negli ultimi 70 anni (1883-1953)*. "Convegno di Studi delle Fonti del Medioevo Europeo" in occasione del 70° anniversario della fondazione dell'Istituto Storico Italiano (Roma 14-18 aprile 1953). Vol. I, Relazioni, 1954, pp. 368
- (2) AA.VV.: *La pubblicazione delle fonti del medioevo europeo negli ultimi 70 anni (1883-1953)*. "Convegno di Studi delle Fonti del Medioevo Europeo" in occasione del 70° anniversario della fondazione dell'Istituto Storico Italiano (Roma 14-18 aprile 1953). Vol. II, Comunicazioni, 1957, pp. 114
- (3) AA.VV.: *Fonti medioevali e problematica storiografica*. "Congresso Internazionale per il 90° anniversario della fondazione dell'Istituto Storico Italiano" (Roma 22-27 ottobre 1973). Voll. I-II, 1976-1977, pp. 650
- (4) AA.VV.: *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo* (Atti delle Settimane), LII, tom.1.2, CISAM, Spoleto, 2005.
- (5) Amory, P.: *People and identity in Ostrogothic Italy, 489-554*, Cambridge University Press, Cambridge, 1997.
- (6) Andreolli, B.: I linguaggi della terra, in *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo...*, pp. 983-1012.
- (7) Everett, N.: *Literacy in Lombard Italy, c. 568-774*, Cambridge University Press, Cambridge, 2003.
- (8) Fissore, G.F.: Segni di identità e forme di autenticazione nelle carte notarili altomedievali, fra

interpretazione del ruolo e rappresentazione della funzione documentaria, in *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo...*, pp.285-333.

(9) Kantorowicz, H.: *Introduzione alla critica del testo. Esposizione sistematica dei principi della critica del testo per filologi e giuristi*, edizione italiana a cura di L. Atzeri e P. Mari, pp. LXI, 111, Subsidia, 9 (Istituto Storico per il Medio Evo), Roma, 2007.

(10) McKitterick, R. (ed.): *The uses of literacy in early Mediaeval Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1990.

(11) McKitterick, R. (ed.): *Carolingian culture: emulation and innovation*, Cambridge University Press, Cambridge, 1994.

(12) McKitterick, R. (ed.): History, Law and communication with the past in carolingian period, in *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo...*, pp.941-982.

(13) Montanari, M.: Il cibo come linguaggio, in *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo...*, pp.85-119.

(14) Mostert, M.: Communication, literacy and the development of early medieval society, in *Comunicare e significare nell'Alto Medioevo...*, pp.29-55.

(15) Wickham, Ch.: *Framing the Early Middle Ages. Europe and the Mediterranean, 400-800*, Oxford, 2005.

なお、Istituto Storico Italiano per il Medio Evo の公式サイトは、URL: <http://www.isime.it/inizio.htm>。ここで、出版刊行事業とその刊行リストを確認することができる。